令和３年度第１回秋田県立近代美術館協議会（要旨）

日　時　：　令和３年７月３０日（金）１３：３０～１５：００
会　場　：　秋田県立近代美術館　研修室
出席者　：

会　長	横　井　　朗	横手市教育委員会教育総務部生涯学習課長
副会長	佐　藤　克　己	横手市立横手南小学校長
委　員	池　田　聖　子	色々美術研究所代表
〃	石　井　令　人	日本放送協会秋田放送局長
〃	伊　藤　聖　子	株式会社秋田ふるさと村営業部イベント企画広報課長
〃	小笠原　　豊	小笠原樺工房代表
〃	鎌　田　あかね	Little A 代表
〃	河　田　美智子	大館市女性センター会計年度職員
〃	長　沢　　薫	秋田県書道連盟理事
〃	渡　辺　　歩	株式会社秋田魁新報社文化部長
事務局	糸　田　和　樹	県生涯学習課生涯学習・学芸振興班 学芸主事（兼）社会教育主事
〃	仲　町　啓　子	近代美術館　特任館長
〃	亀　沢　　覚	〃　館長
〃	保　泉　　充	〃　副館長（兼）学芸班長
〃	土　田　友紀子	〃　総務班　副主幹（兼）班長
〃	北　嶋　幸　生	〃　〃　副主幹
〃	髙　階　　奨	〃　〃　主事
〃	鈴　木　秀　一	〃　学芸班　副主幹
〃	木　村　雅　洋	〃　〃　学芸主事
〃	羽　川　　尚	〃　〃　学芸主事
〃	藤　井　正　輝	〃　〃　〃
〃	小　林　紀　子	〃　〃　〃
〃	秋　田　達　也	〃　〃　〃
〃	鈴　木　　京	〃　〃　主任（兼）学芸主事

＜次　　第＞
1　開　会
2　任命書交付
3　特任館長あいさつ
4　委員・職員紹介
5　会長あいさつ
6　協議
　(1) 令和２年度近代美術館事業の概況について

(2) 令和３年度近代美術館事業の概要について
亀沢館長がパワーポイントを使用して(1)(2)について事業等を説明
(3) (1)･(2)について一括の協議・質疑応答
7　閉　会

＜協議概要＞
（発言者：●委員　→事務局）

●協議委員になり、特別展以外にもコレクション展や特任館長講座、創作体験プログラムがあることを初めて知った。特別展以外の情報をなかなか意識して探せていないと感じてるところだが、特別展以外の活動の発信方法はどのようにしているか。また、参加者が少ないと感じているが、今後、他の発信方法が必要ではないか。

→コレクション展については、ホームページへの掲載とチラシの配布くらいである。チラシは、予算的にもあまり多く作成できないため、配布は限られた範囲になってしまっているのが現状である。教育普及としては、「特任館長講座」、「きっずあーと」、「みんなの教室」、「美術館教室」等を開催しているが、これらもホームページへの掲載とチラシの配布により広報し、参加者を募っている。特別展以外のチラシは館内で作成、印刷している。
　その他の発信方法としては、ツイッターやフェイスブックを利用し、広報活動を行っている。また、横手市役所において行われる定期会見に月１回出向いて宣伝している。市役所の広報はユーチューブ等にアップされている。その他、県庁掲示板等でも各種宣伝を行っている。

●チラシは、何枚くらいどのような場所に配布しているか。

→コレクション展は、県内の道の駅等、人が多く集う各種施設に、１００から１，０００枚くらいずつ配布している。

●チラシの設置やツイッター、フェイスブックでの発信も行っているようだが、受け手が積極的に探さないと情報が入ってこない。メルマガのように登録すると定期的に情報が届くような、懐に飛び込んでくるようなものがあれば、もっと積極的に情報を知ってもらえるのではないか。

●いろいろ広報しているようだが、なぜか届いてこない。「ときめく美人展」も良い展覧会だった。本当ににいいものをやってるのになかなか届かないのは、もどかしい。具体的にはまだ浮かんでこないが、何か解決策があるように思う。最新の情報がわかるようなシステムがあるといいと思う。

●「ときめく美人画展」は観覧の機会がなかったが、評価の参考とするため、来場者の目標数、来場者の反応なども具体的に説明いただきたい。

→目標は 6,000 人（正しくは 10,000 人）としていた。
　今回は、明治から大正、昭和を網羅しているコレクターというのが一つの目玉であり、55 名の作家の作品を展示した。その中には、秋田にゆかりのある作家もおり、寺崎廣業の作品を含め 95 点の展示となった。来場者からは、作家の数が多く良かったとの評価をいただいている。また、今回は美人画の細部も観ていただくために特製の薄型ケースを使って展示したが、そのケースの使用もたいへん好評だった。

●「ときめく美人画展」について、集客に結びつかなかった理由は、どういったことが考えられるか。

→新聞の広告等、限られた予算の中でいろいろ広報を考えたが、美人画展を好む層の方に、私たちの作戦がマッチしなかったからではないかと反省している。

●今回、若い人たちはあまり来なかったのか。

→年代別でいうとそのとおりである。
　ツイッターで、やわらかく面白い解説を全部で 32 回投稿した。

●それなりの充実した内容ではあるが、なかなか若い人に届かず、ＰＲの仕方に若干課題があったということか。

→そのように考えている。

●何かできる方法はないかと考えたが、なかなか難しいと感じる。

→美人画展は、作品として素晴らしいものが随分あり、専門家からも行きたいがコロナ禍で来館できないとの声が多かった。内容としては、とても良かったと思う。ある程度高い年齢層の方にうけそうな内容であったが、高齢者が美術館へ足を運ぶ頻度はどこも落ちており、入場者が少なかったのはそれも原因の一つと考えられる。ツイッターも見ている人はいるが、美術館に足を運ぶ動機にまでは結びつかなかったと思われる。

●「ときめく美人画展」で特製の薄型ケースを使用していることは、広報の際、知らせていたか。

→薄型ケースの使用について、チラシには載せていないが、ツイッターで見どころ紹介の際に何回か触れている。

●特製のケースまで作って臨んでいたと知ると、その思い入れが伝わってくる。展示する側の熱量がわかると、今まで興味がなかった人も観に行ってみようと反応することもあるのではないかと思う。

●「ときめく美人画展」は予備知識なしで観覧したが、解説を聞きながら観たのでたいへん面白く、印象に残った展覧会だった。実際に観ると面白いという、予備知識だけで感じるようなエッセンスがあってもよかったかもしれない。ちょっとしたところの試行錯誤だと思うが、これからもいろんなことで磨いていただけると思う。

タイトルをつける場合、知識がない人にどうアピールするかにしても、試行錯誤の中にはあるかもしれない。来てよくわかる前に、どういうものかというところをかみ砕くというようなことも、試行錯誤の中にあるのかと感じた。

●「ときめく美人画展」のタイトルが気になり、ときめきを求めて観たが、しっとりといい展示だという印象を受けた。ときめくという言葉を何か活かしても面白い展示になったと思う。見せ方、その路線のようなものも、タイトルとその内容を近く一致させるような工夫もあるとよかったのではないかと感じた。展示としては、楽しむことができた。

●特別展の評価について、実際に観覧しただけでは非常に評価が難しい内容がある。ギャラリートークやワークショップ等、イベントすべてに参加しなければ書けないと感じる。説明のあった内容と来館者アンケートの集計結果で評価することについても、今一度検討していただきたい。

→展覧会や講演会、ギャラリートーク、ワークショップ等、すべて参加するというのは難しい面があると思われる。参加できなかった、また、資料だけでは判断できないというところについては未記入とし、可能な範囲で評価をお願いしたい。

●内容に対して評価できるような資料が欲しい。情報がもう少しあれば評価しやすいと思われるので、検討いただきたい。アンケートを書いている来館者は少ないと思われるので、抽選で当たる、メールで案内が届くといった特典をつけるなど、アンケートをもっと書いていただくような工夫も必要ではないか。

資料にあるアンケート集計のイベント情報源の中にインターネットとあるが、このインターネットとは具体的にインターネット広告であるか。ホームページとは違うインターネットの中に何か情報があるということか。

→企業が行っているインターネットミュージアムというものがあるが、そういったところに情報を提供して展覧会の広報をしてもらっている。全国的に広報していただけるようなところ何箇所かお願いしている。

無償で広告を掲載してくれるウェブサイトがあり、常に情報提供するようにしている。「滝平二郎展」については、ＮＨＫの「アートシーン」にも資料を送り、取り上げてもらえるか検討してもらう予定である。

実行委員会形式の展覧会であれば、共催相手が特設ホームページを作成してくれることもある。また、全国にチラシをアップしてくれる「チラシミュージアム」やウェブ上で紹介してくれるサイトもあり、情報提供している。

●ウェブ上で情報紹介できるようなところがあれば、学芸主事のおすすめポイントや来館者の声等をどの期間中でも出していけば、目をとめた人たちが来館するのではないか。

→今はまだ２件のみであるが、ユーチューブで作品の解説動画をアップし始めている。そのユーチューブの既設のチャンネルを使って、おすすめポイントの紹介ができるとよいと思う。

●１年前に委員からでた意見を美術館スタッフは真摯に受けとめ、改善しようと前向きで、素晴らしいと感じている。大館にもう１回、出前美術館持っていきたいという意見が早期に実現し、本当に真摯に一つ一つ考えて改善しているのが見える。委員の意見は、次に必ず活きてくると確信している。美術館スタッフに、大館を代表し、感謝申し上げる。

●昨年度、この会から出された要望等に即座に対応していただき、本当に有り難い。全て対応するのは難しいと思うが、引き続きできることから順に対応していただきたい。

●今年の４月から６月までの間、セカンドスクールとして小・中、特別支援学校が利用しているようだが、主にどういった地域の学校であるか教えていただきたい。また、コロナの関係で小・中・高等学校の修学旅行等が県内等々に変更されているようだが、そういった利用はどれくらいあるか。

→セカンドスクールについては、人数のほか、地域別の統計もとっている。横手市、そして隣接する湯沢市、大仙市、美郷町が多い。秋田市や由利本荘市からも数校来館している。修学旅行では、能代第一中学校や男鹿の小学校が、直前に岩手への修学旅行を取り止め、当館に来館している。昨年度も修学旅行の行き先として県内の資源に目が向けられており、ふるさと村や当館にも来館いただいている。
　県から通知があり、県外からの修学旅行団体について、一般の方と同様、自由に観覧はしていただいているが、当館職員が付いてガイドをすることは見合わせている。

●ガイドは見合わせているとのことだが、通常、来館する方はふるさと村を訪れた流れで来館しているのか。それとも、企画展の観覧やワークショップへの参加等、目的があって来館しているのか。

→直接、当館に来館いただく場合もあるが、ふるさと村で１日過ごす場合もある。

●ふるさと村の学校団体利用について、６月は、県北の小学校、中学校、県外は宮城県や岩手県からも来場があったが、内容としては手づくり体験がメインになることが多い。ふるさと村に予約が入る場合、美術館の見学はあまりなく、直接、美術館に問い合わせしてる場合が多いと感じている。

●こういうご時世であり、美術館に予約して活動するということは非常に厳しいと感じている。そのような中でも、足を運んでいただけるような手だてを検討していただければと思う。子どもたちが本

物の芸術に触れる機会がだんだんなくなってきている。美術館からも、そのような機会を子どもたちに与えていただければと思う。

●近美創作体験プログラムの工芸教室講師である齋藤國男氏の団体名は、正しくは秋田県工芸家協会である。

●近代美術館というと、どうしても美術というイメージがついてしまい、書道に携わっている人にとっては、足が向かない場所の一つになっていると思われるが、本来であれば美術の中に書道も含まれているはずである。

　秋田県にいると本物の書道を観る機会が少なく、寂しいと感じている。東京国立博物館と台東区立書道博物館が毎年連携で開催している展覧会が秋田でできたら、全国初であり、すごいことだと考えている。入場者数等、様々な問題があることは承知しているが、若い層には本物の書道に触れ、伝統を大事にしていくことをメッセージとして伝えたいし、年配の方にとって、他県に行けない状況の中、秋田で本物を観れることは価値あることだと思う。また、美術館の「秋田の文化を未来へつなぐ」という面でも、本物を展示し、秋田ゆかりの書家の作品を並べる等、墨のほうにも目を向けていけたら、新しいお客さんが出向いてくれるのではないか。

●書の見方が全くわからないと、本物が来ても楽しみ方がわからない。取っ付きやすいものの情報を入れながら、本物の書の楽しみ方や学び方の手助けになるような展示があったら良いのではないか。

→これまで当館で開催したものは、松井如流、大井錦亭といった大御所の展覧会のみであった。なかなか取っ付きにくい面があるので、書がわからない人にも取っ付きやすく面白いものを利用しながら親しみやすい展覧会を考えたいと思う。書の展覧会を開催したいという思いはあるが、我々にとってもなかなか難しく、どのようにしたらよいか常々考えている。今後、開催できるよう、ご協力いただければと思う。

●書の展覧会については様々な課題もあると思うが、開催に向けて検討いただきたい。全国初という冠がついた開催が実現することを期待している。

→いただいた貴重な意見は、今後当館の運営に反映させていきたい。また、今後とも気づいた点があれば意見を寄せていただきたい。